

## 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十四）

## 植 木 久 行

●三三五番 白居易「燕子樓三首」其一「燕子樓中霜月夜、秋來只爲一人長」

○元和十年（八一五）の春、都長安での作。作者四四歳。太子左贊善大夫（正五品上、東宮官）在任（花房・朱『箋校』・羅）。本詩を秋ではなく、春の作と見なす論據は、連作三首其三の起句「今春、客（後述の張仲素）有り 洛陽より回る」であり、すでに羅『年譜』や陶敏・李一飛ほか『唐五代文學編年史（中唐卷）』<sup>(1)</sup>も、同意見である。少なくとも春以後の作であることは、疑いない（同年秋八月、作者は江州司馬に左遷される）。

「燕子樓」詩には、本詩作成のモチーフをみずから語る、長い序文が付されている。それには、ほぼこういう……故の徐州（江蘇省徐州市）刺史張尙書（愷）<sup>(3)</sup>。元和元年「八〇六」冬没

には、歌舞の巧みな美しい愛妓盼盼（宋版紹興本は眇眇）<sup>(4)</sup>がいた。私は校書郎に在任中、徐州・泗州付近に旅した。このとき、張尙書は私のために酒宴を設けて下さり、「酒酣<sup>(5)</sup>なるとき、盼盼を出して（歌舞を演じて）以て歡を佐け」させた。かくして座は盛りあがり、私は彼女に「醉嬌 勝へ得ず、風は媚<sup>(6)</sup>がす（春風がゆらゆらと動かす） 牡丹の花」（逸句）という詩を贈った。その後、消息がとぎれて現在に及び、「僅<sup>(7)</sup>と一紀（十二年）」になる。そしてこう續ける。

昨日、司勳員外郎張仲素（字、續之、<sup>(8)</sup>子を訪ひ、因つて新詩を吟ずるに、「燕子樓三首」有りて、詞甚だ婉麗なり。其の由を詰ふに、盼盼（眇眇）の爲に作りしなり。續之は武寧軍（徐州に鎮する節度使）に従事（武寧軍節度使張愷の幕僚）たること累年（多年）、頗だ盼盼の始末（一部始終、特に

後日談)を知れり。(續之)云ふ、「尙書(張愔)既に歿して、東洛(東都洛陽北郊の邙山)に歸葬さるるも、彭城(徐州の郡名)に張氏の舊第(舊邸)有り。第中に小樓有りて燕子と名づく。盼盼、舊愛(亡き張愔への愛情)を念ひて嫁がず、是の樓に居むこと十余年。幽獨・塊然(孤獨なさま)たりて、今に尙ほ在り(生きながらえている)」と。予、續之の新詠を愛し、彭城の舊遊に感ず。因つて其の題に同じて(唱和して)三絶句を作る。

つまり、白詩は張仲素(？一八一九、字續之)の「燕子樓三首」に唱和(次韻)した作品である。引用した序中に、「新詩(近頃完成したばかりの詩)」とある以上、張仲素の詩三首も、元和十年春の作と考えてよい。

ちなみに、武寧軍節度使・徐州刺史張愔の酒席は、貞元二十年(八〇四)、作者三三歳の春とされる(花房・朱・羅)。當時から本年(元和十年「八一五」)までの期間が、十一年強になって、詩序の「僅ど一紀(あるいは「一紀に僅し」と符合するため、この推定は妥當である)。従つて白詩「燕子樓三首」の作成を、一年早い元和九年とする邱燮友「白居易燕子樓詩」、および元和九年冬の作とする王拾遺「白居易傳」の説は誤りとなる。この點は、緩やかな繫年配序を行う『白氏

文集』内の排列狀況を調べてみても、充分傍證される。といふのは、「燕子樓三首」前後の詩は、みな元和十年の作だからである。

○「燕子樓」 武寧軍節度使・徐州刺史張愔の任地、彭城(徐州)城内の邸宅中であつた小樓の名。『大明一統志』卷十八に、「燕子樓は(徐州)州城の西北隅に在り。唐の貞元中、尙書張建封(張愔の父の名。子と父の名を取り違えたもの)、徐州に鎮す。妾有りて盼盼と曰ひ、(彼女の)爲に此の樓を築いて以て之に居らしむ。建封既に卒し、盼盼は樓に居ること十余年、嫁がず」とある。有名な北宋の文豪蘇軾は、元豐元年(一〇七八)の晩秋・初冬のころ、この燕子樓中に一泊している。當時、彼は徐州の知事であり、みずから「彭城にて夜燕子樓に宿し、盼盼を夢む。因りて此の詞を作る」と記した有名な詞「永遇樂」を作つた(當時、四三歳)。そのなかの「燕子の樓は空しく、佳人(美女の盼盼) 何にか在る、空しく鎖す 樓中の燕」という一節は、佳句として名高い。

白詩とその序を源泉として詩跡化した燕子樓は、蘇軾とはほぼ同時期の陳薦や黃裳らによつても詠まれ、明末清初の錢謙益に到る詩までが傳存する。しかし今日では、すでに遺跡の所在そのものが不明である。それはともかく、燕子樓は張尙

書との愛に殉じて、彼の死後も再婚しなかつた盼盼の健氣な生き方、特に妓妾としては珍しい節義に感動して、その薄幸の生涯をしのぶ詩跡（古典詩人たちが詠み重ね、刻みつけてきた詩心の傳統を深々と宿す聖地の意。わが國の「歌枕」と類似する詩學用語）になつた。

他方、こうした詩跡の誕生にともない、遅くとも北宋時代には、虚構をまじえた哀婉な燕子樓物語が生まれて、後世に傳わるることになった。北宋の張君房編『麗情集』（一種の傳奇雜事小説集。南宋初めの曾慥編『類說』卷二十九所收）には、

張建封僕射、節制武寧、舞妓盼盼、公納之燕子樓。白樂天使經徐、與詩曰、「醉嬌勝不得、風嫋牡丹花」。公薨、盼盼誓不他適、多以詩代問答。有詩三百篇、名『燕子樓集』。云々という。

ところで樓名「燕子樓」の由來は不詳。「燕子」は燕を言う白話。「子」は唐代に頻用された接尾辭で、元來、小さいものに付く。<sup>(18)</sup>杜甫の「細雨魚兒出、微風燕子斜」（「水檻遣心二首」其一）は、その一例である。『六注』には、三種の樓名説をあげるが、そのうち最も穩やかな説に、こういう、「彼ノ樓ヲ造ル時、燕飛來レハ、燕子樓ト名付ト云也」と。この命名説は、『和漢朗詠注』<sup>(19)</sup>の中の、「尙書生タリシ時ハ、

燕、多ク來テ、巢ヲカケシカ故ニ、燕子樓ト云也」と近い。しかし筆者はむしろ、孟浩然の「賦して『盈盈たる樓上の女』」（「古詩十九首」其二の句）<sup>(20)</sup>を得たり」という詩の、「燕子家家入、楊花處處飛」などの表現に注目する。燕子樓の名は、傳統的な「樓上の思婦」のモチーフ（留守居を守る女性の住む高樓）の變奏とも言える名稱なのである。

ちなみに、樓名のかもし出す獨特の語感については、次のような發言がある。「燕子樓の中のみずから課した孤獨——その名は最も家庭的な鳥にちなみ、その傳統的な多産性は彼女の生活の不妊をあざ笑っている」（ステイブン・オーウェンの説）、「雌雄つがいで暮らし、雙び宿り雙び飛ぶ燕は從來、これを用いて、仲の良い夫婦を比喻してきたため、最愛の張悱を亡くした盼盼は、雙宿雙飛の燕を見て、鳥にさえ及ばぬわが身 pensando 嘆くのだ」（沈祖芬・程千帆の説。要約）と。こうした見方は、たとえば傳統的な思婦の嘆きを詠む初唐の沈佺期「古意」詩の冒頭「盧家少婦鬱金堂、海燕雙樓玳瑁梁」<sup>(24)</sup>や、中唐の楊凝（？）<sup>(21)</sup>「春怨」詩の「綠窓孤寢難成寐、紫燕雙飛似弄人」の句を思い浮かべさえすれば、充分肯定できよう。

ここで白詩が最も難しい次韻の形式で唱和した張仲素「燕

子樓三首」其一をあげておきたい。「樓上殘燈伴曉霜、獨眠人起合歡牀。相思一夜情多少、地角天涯不是長」(『全唐詩』卷三六七)。この詩は、張愔の死後十年間にわたる眠れぬ一夜の、それも秋深く霜の降るわびしい夜のありさまを、盼望の口吻に託して描いた一種の閨怨詩である。これに唱和した白詩は、夜がふけても次々と湧き起こる思い出のために眠れず、秋の夜長を明かしかねる状況を、「滿窓明月滿簾霜、被冷燈殘拂臥牀。燕子樓中霜月夜、秋來只爲一人長」と詠んだのである。西村富美子「燕子樓」詩をめぐって――妓女詩人關盼盼に關する『唐詩紀事』の虚構性を問う<sup>(26)</sup>は、唱和詩間に見られる類似した表現の、微妙な異同を、こう指摘する。

白居易が和した詩の第一首は、もとの第一首にあわせて、「樓上」を「燕子樓」、「殘燈」を「燈殘して」、「曉霜を伴い」を「滿簾の霜・霜月の夜」、「獨眠の人」を「一人」、「合歡の牀」を「臥牀」、「是れ長きにあらざ」を「一人の爲に長し」と表現を變えて、やはり孤閨の哀しみを描寫する。

白詩は、張詩の表現を念頭に置いて、不即不離の關係を保ちながら、「故の徐州刺史張愔の愛妓盼盼に代つて家居の苦況を述べた詩」(佐久節「題義」)である。いずれも、男性の

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂(十四)(植木)

作者が、作中の女性の立場に立って異性への慕情(特に愛情の喪失感・非充足感)を歌う閨怨詩的發想を持つ。慕情の相手<sup>が</sup>が永遠に會えない死者である點は、通常の閨怨詩と異なるようにも見えるが、作中の女性にとっては、對象の男性は少なくても情情的にはまだ生存し續けているのである。従つて「燕子樓に霜夜の月がさえわたる。このような夜は、その樓に獨居したという女性のことが思い出されて眠ることができない」云々と譯す菅野禮行の新譯は、大きな誤りであろう。「燕子樓中：」以下の二句は、夜がふけても眠れぬ盼盼の獨白<sup>つひや</sup>を思わせる。張詩第二首の承句に「燕子樓中思悄然」とある。

「霜月夜」南宋初めの計有功『唐詩紀事』卷七八、張建封妓の條には「寒月夜」に作り、南宋の洪邁『容齋三筆』卷十二、「眇(盼)春秋娘三女」には「霜月苦」に作る。また前掲の『麗情集』には、一句全體を「燕子樓前清月夜」に作る。いずれも傳承過程で發生した異文である。「霜月」は一般に「霜のごとき月」、つまり寒い深秋の夜の、霜のように冴えわたる月(時にはその降り注ぐ冷たい光線を含む)を指すことが多い(もちろん、冬の場合もある)。たとえば劉宋の鮑照「和王護軍『秋夕』」詩の「散漫秋雲遠、蕭蕭霜月寒」(對句)

## 中國詩文論叢 第二十一集

は、その一例である。また白詩の「月色は白くして霜に似たり」(「秋夕」卷10)、「月は新霜の色を帯ぶ」(「酬夢得霜夜對月見懷」卷33、後集卷14、冬の作)の表現も思い起こされてよい。

しかし本詩の「霜月」は、起句の「滿窓の明月 滿簾の霜」を承けて、霜・月の二字を意識的に反復させた表現であるため、當然「霜と月」の意である。従って「霜月の夜」とは、「霜繁く降りて月明らかなる夜」(金子・江見「新釋」)を意味することになる。白詩「冬夜與錢員外(徽)同直禁中」(卷5)の、「夜深草詔罷、霜月凜凜」は、どちらの解釋をも許容しそうであるが、やはり「霜のごとき月」の意味であろう。ちなみに、白詩「内に贈る」(卷14)詩にいう、「月明に對ひて往時を思ふ莫かれ、君が顔色(容色)を損なひ、君が年(生命)を減めん」と。柿村「考證」が一句の譯の中で、「燕子樓中月明かに霜沍えたる夜は」の後に、「殊に往時の事ども思ひ出されて寐ねられず」の語を補足しているのは、きわめて妥當である。

ところで霜は中國の古典詩にあつては、天空に滿ちわたり、空中を流動・飛散する白い氣、と感覺されていたようである。初唐の張若虛「春江花月の夜」の「空裏の流霜(月光の白さに紛れて)飛ぶを覺えず」や、中唐の張繼「楓橋夜泊」詩の

「月落ち 烏啼いて 霜 天に滿つ」は、こうしたイメージを裏付ける。古い傳承によれば、霜や雪をつかさどる秋の女神青衣(青霄玉女)が天空から降らせるのだ、ともいう(「淮南子」天文訓)。杜甫の「秋夜五首」其四に、「飛霜は青衣に任す」とある。もちろん、「霜降る」(「禮記」月令篇、九月)の語もある。詩中の「霜月の夜」も、冷やかな月の光と霜の氣とが秋の高い夜空から、時には交錯しつつ、あたり一面に白々と降り注いでやまない、きわめて動的な光景なのである。起句に見える窓や簾の語に、あまりとらわれすぎてはなるまい。

○「秋來」 古くは「秋來つて」と訓讀したが、この「來」はすでに實義を失って、「訪れる」意味を持たない。また二字で「秋になってから、秋以後は」(田中克己「白樂天」)の意味でもなからう。この來は、今來・朝來・晚來・夜來などの來と同様に、時間を表す名詞の後に置かれた助字(名詞詞尾)と考えられ、むしろ「秋來」と音讀すべきであろう。「夜來風雨聲」(孟浩然「春曉」)、「朝來入庭樹」(劉禹錫「秋風引」)、「春潮帶雨晚來急」(韋應物「滁州西澗」)などは、こうした著名な用例である。これと似た形で季節に付いた助字「來」の用例としては、すでに陳の江總「梅花落」詩の「胡地少春來

〔春來〕で春の意。塞外の地には春がほとんどない、三年驚落梅〔が指摘されているが、白詩「東遊を想ふ五十韻」(卷27、後集卷9)の「幻世春來夢、浮生水上漚(あわ)も同様であろう。また本詩の「秋來」と同じ用例としては、中唐の戴叔倫「九日(重陽節)洛陽の李丞の 任に之くを送る」詩の「獨恨滄波侶、秋來別故人」、晚唐の黃巢「不第の後、菊を賦す」詩の「待到秋來九月八、我花開後百花殺(枯死する)」、杜荀鶴「旅中 病に臥す」詩の「秋來誰料病相繁、枕上心猶算去程」などをあげることができよう。唐代、こうした名詞詞尾「來」の増加は、聲律上、句中の二・四・六字目の節奏點(リズム・ポイント)に、平字を配置するためであったらしい。ちなみに、本詩の秋は、中國の傳統的な季節感、いわゆる「悲秋」<sup>(30)</sup>を踏まえ、特にその長い夜を指す。『六注』に「下旬ハ、長夜ヲ悲ム義也」という。

○「只爲一人長」 この介詞「爲に」<sup>(31)</sup>は、動作や行爲が發生するときの、向かう對象を指し、「對」「向」(〜)に對して、(〜)に向かつて)に近い用例であろう。ほかの人たちが皆寢靜まった時刻なのに、昔のことがいろいろ思い出されてなかなか寝つけず、物憂き秋の夜は、わが身一人に對してだけ、異様に長々しいように感じられることをいう。こうした「爲」<sup>(32)</sup>

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂(十四)(植木)

の用例は、陶淵明「桃花源記」中の「不足爲外人道也」が、特に有名である。「只」はもちろん、限定・強意の副詞。ちなみに、孫琴安『唐人七絕選』<sup>(33)</sup>は、「一人」を「禮部尙書張建封」を指すとするが、この説には従いがたい。おそらく「爲」を原因・理由の意味にとつたための誤讀であろう。

○「秋來……」 「古詩十九首」其十七に、「愁ひ多くして夜の長きを知る」とある。また本詩より少し早く作られた友人元稹の「解秋(秋の解明)十首」其八に、「春非我獨春、秋非我獨秋」とある。次韻した張詩の韻字「長」の制約を受けながらも、友人の「秋は我が獨りの秋に非ず」の句が思い浮かんで、それを巧みに反轉させて詠んだ可能性もあろう。

●二四二番 白居易「八月十五夜、禁中に獨り直して月に對す。元九に寄す」三五夜中新月色、二千里外故人心」

○元和五年(八一〇)八月十五日(この年は秋分の日)、作者三九歳、都長安での作(花房・朱・王・羅)。京兆府戶曹參軍・翰林學士在任。南宋紹興本は、詩題を「八月十五日夜、禁中獨直、對月憶元九」に作るが、しばらく北宋初期に成る『文苑英華』卷一五一(明版)の「八月十五夜、禁中獨直對月。寄元九」に據る。というのは、①本詩に和韻(用韻)した元

槿の唱和詩が、「酬樂天八月十五夜、禁中獨直、翫月見寄」(樂天の八月十五夜、禁中に獨り直し、月を翫でて寄せらるるに酬ゆ。南宋刊本を忠實に書寫した明の楊循吉による影宋鈔本『元氏長慶集』卷十七所收)と題する。つまり、「十五日夜」ではなく「十五夜」に作り、「憶元九」ではなく「見寄」とあること。

②十世紀半ばごろ、大江維時(八八八〜九六三)が編纂した唐代七言詩の秀句集『千載佳句』時節部・八月十五夜(鎌倉時代書寫の古鈔本・金子校訂本)に、「八月十五夜、禁中對月、寄元九」とある。

③大江匡房(一〇四一〜一一一〇)の言談を、藤原實兼(一〇八五〜一一二〇)が筆録した『江談抄』第四にも、「八月十五夜、禁中對月、寄元九」に作る。

④『貞和本和漢朗詠集』に、「八月十五夜、禁中獨直對月。寄元九」と題するためである。『文苑英華』の「寄」の字には、「集作憶」の校記が付されている。この「集」は、南宋の周必大が彭叔夏に『文苑英華』の校勘を命じたころの『白氏文集』(刊本)を指し、現存の紹興本と一致する。言い換えれば、『文苑英華』自身が據った北宋初期の古いテキスト(寫本)には、「寄」字に作っていたのである。おそらく南宋版「八月十五日夜」の日は衍字、「憶元九」は「寄元九」を、本詩の内容に即して改變したものであろう。平岡武夫『白居易』が本詩

を、「八月十五夜、禁中に獨り直して月に對す。元九に寄る」(二五三頁)と題するのは、ほかならぬこうした校勘の結果であらう(ただし、校勘の經緯に關する言及はない)。

○「元九」 七歳年下の元稹を、親しみをこめて排行で呼んだもの。元稹は本詩の作成された元和五年三月、監察御史として河南尹房式の不法を厳しく糾弾し、さらに宦官劉士元と紛争した剛直さが災いして、左拾遺白居易らの辨護も空しく、遙かな長江のほとり、江陵府(湖北省荊州市)土曹參軍へと左遷されていた。二人が別れて後、初めて迎えた中秋名月の夜、作者は大明宮内の翰林學士院の中で、ただ獨り宿直する深夜、秋天高く澄みわたる満月を見つめつつ、元稹を思いやって本詩を作ったのである。

○「禁中獨直」 「禁中」(宮中)は本詩第二句に「獨宿相思在翰林」と歌われる、都城の東北部に突き出た大明宮内の翰林院(通稱)、正式には翰林學士院を指す。この翰林學士院(天子に直屬する私的諮問機關)は、じつは獨立した官署ではなく、單に執務する場所に過ぎない。中書省に屬するとも記されるが、これは誤りである。大明宮内の翰林院(天子の趣味・教養などのお相手をととめる、書・畫・棋・醫術などに秀でた者たちが翰林待詔として召される場所。それに隣接する「待詔居」

が彼らのたまり場であろう」と、その南に開元二六年（七三八）分離・獨立した翰林學士院の位置は、今日なお未確定のようである。一部の發掘調査によつて大明宮西の夾城（牆壁に夾まれた所）内に設けられていたともされたが、まだ確定の域には達していないようである。唐代以來の文獻に據れば、大明宮の北半を占める内廷（内朝）内の西側に置かれた麟德殿（貴族や皇族、外國の使節との面會、盛大な宮中の宴會などに用いられた、壯麗な宮殿。その位置は確定）の西に位置していた。そこは夾城内とは近いものの、大明宮内なのである。<sup>(42)</sup>

ちなみに翰林學士院は、「花磚道」によつて南廳五間（五部屋）と北廳五間に分かれ、翰林學士承旨（翰林學士院の院長）の執務室「承旨閣（院・閣）」は、北廳の東端に置かれていた。白居易は翰林學士の一人に過ぎなかつたので、承旨閣を除く部屋の一つを、専用の執務室としてもらつていたのであろう。翰林學士は宿直制度を主な職務方式とし、單獨で皇帝に直屬して、將相大臣の任免、大赦の發布、征伐など軍事關係の重要な詔敕を執筆するとともに、皇帝の諮問に答え、身邊に侍従することを通して、政策の決定にも大きな影響を與えたのである。<sup>(44)</sup>

○「三五夜中……」 この著名な頷聯は、對偶された内容

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（十四）（植木）

（概念）が相互に明確に對應する「明對」の典型であり、清の乾隆帝は「本色（質朴自然）」の語なるも、屬對「對句」却つて極めて工みなり」（『唐宋詩醇』卷二三）と評する。「三五」は、すでに柿村『考證』に指摘されるように、後漢の「古詩十九首」其十七（『文選』卷二九）の、「三五 明月滿ち、四五（二十日） 簾免（月の異名。月中に住むというヒキガエルとウサギに基づく呼稱）缺く」以來の表現である。本聯の發想には、南朝・宋の鮑照の「三五 二八（十六夜）の時、千里 君（遠く離れた友人）と同じうせん」（「月を城西門の解中（官舎）に翫づ」）、『文選』卷三十）や、同じ時期の謝莊「月の賦」（『文選』卷十三）の、「美人（思慕する人）邁きて普塵（たより）闕け、千里を隔てて明月を共にす」などが、影響を與えていよう。

○「新月考」 從來、本詩の「新月」は、①東方からのぼり始めた（あるいは、出たばかりの）月、②清新な輝きを持つ月、③①と②を合わせて、東の空に出たばかりの、大きく明るい月、と考えられてきた。<sup>(45)</sup>ところで詩語「新月」は、「微月（光のかすかな月）の初めて生ずるなり」（『江談抄』第四）と指摘されるように、一般に「初月」と同様に、舊曆（太陰太陽曆）二〜四日前後の細長い三日月を指す。たとえば韓愈「新月 磨きし鎌に似たり」（『晚寄張十八助教（籍）……）、白



詩「新月 一張の弓」(「秋寄微之十二韻」卷24、後集卷7)などは、この例である。孟浩然の「他郷七夕」詩の「新月 始めて秋に臨む」の例は、舊曆では月齡と曆日とがほぼ一致するため、左半分の缺けた、半月に近い上弦の月(正午前後にのぼり、夕刻時に南中する)であったはずである。すでに陳の江總「秋の日、廣州城の南樓に登る」詩にも、「新月 半輪空し」とある。さらに中唐の錢起「九日(重陽節)田舎」詩にも、「浮雲暝鳥飛將盡、始達青山新月前」とあり、九日の月をも新月と呼んでいる。<sup>(47)</sup>これによれば、少なくとも「新月」は、「初月」とは異な<sup>(48)</sup>って、半月以上の、九日の夜の月までは呼ぶことができるらしい。

ところで本詩(白詩)の「新月」は、明らかに三五夜(十五夜)の満月である。とすれば、ほぼ日没とともに天空にのぼり始め、日の出とともに沈みゆくため、夜がしだいに更けゆく「鐘漏深し」(第六句)の状況下にあつては、通説のうち「①東方からのぼり始めた(あるいは、出たばかりの)月」では解釋しがたくなる。

こうした解釋上の難問に對して、鈴木虎雄は「豹軒詩話」<sup>(49)</sup>「文字の對と概念の對」の條で、下の三字は概念からは

「新月色」「故人 心」であるとして、こういう。

出たての月を新月といへぬことはないにしても、新月といへば三日月を稱することになつてゐる習慣があり、又た同じ詩に浴殿東頭鐘漏深とあるからには夜深よふかの月であつて出たての月ではない。

と。近藤光男「序説―中國古典詩の構成」(同編『中國古典詩叢考』勁草書房、一九六九年)は、この鈴木説を承けて、こういう。

對句の一般的原则(對句の一方が讀みがたい場合には、それと對する部分を参照すれば讀みやすくなること…引用者注)にひかれるために、いまひろく誤讀が行われている。「中秋明月の夜、さし出たばかりの月の色」と解釋するのが通説のようであるが、それは「故人―心」というまとまりに對して、「新月―色」というまとまりがいかにも考え易いところから來ている。しかしすでに「夜中」という語が夜半をあらわしており、また詩の次の聯には「鐘漏―深」(夜も更けた)と言っている。中秋名月(満月)が、夜半においてさし出たばかりなどということは、天文学上の眞實を犯すものはなほだしい。この對は「新―月色」(すみ切った―月の光)と「故人―心」(わが友の―こころ)でなければならぬ。

と。この近藤説では、「三五夜中新月色」の夜中が夜半の意であることを指摘して、前掲の鈴木説を補強している。

同じ『中國古典詩叢考』に収める吉田喜久子「三五夜中新月色、二千里外故人心——白居易の禁中獨直詩」も、同様の觀點から、「今宵、中秋明月の夜もはや半ば、秋空高く、さわやかに輝く満月の色を見るにつけ、…」(傍點は引用者)と譯し、さらに補足説明を加える。

新月の新とは、清新の新、すなわち、さえわたる月の光り、「新しい月色」であると解くことが、もとより可能である。それならばこの新月は夜半の月であつてもよい。現に「三五夜中」の夜中とは夜半をいうことばである。満月の夜のそれはすでに南中している。

そして阮籍の有名な「詠懷詩」中の「夜中 寐る能はず」(『文選』卷三三)を注して、三五夜中の夜中は眞夜中を意味する、と考えたのである。もっとも「夜中」の語は、いつも眞夜中を意味するわけではないが、廣く夜間を意味することだけは確かである。本詩の第一句「銀臺金闕夕沈沈(夜が靜かに更けゆくさま)」との呼應關係を考へても、この「夜中」は夜の淺い時間帶ではなからう。

吉田論文は、さらに「新月色」の色についても、同じ卷

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂(十四)(植木)

(二年前の作)に收め、「秋月高く懸かる 空碧(碧空)の外」の句で始まる白詩「八月十五夜、聞崔大員外(群)翰林獨直、對酒詠月」の、「皓色分明雙闕傍、清光深到九門關」を引いて、あざやかに冴えわたる月の光を形容する「皓色」と「清光」とが對文同義の關係にあることに着目し、「新月色」の色は、「透明の光り」、「色ならばさえわたったしろがねの色」を指すとする。

いずれも、參照に値する興味深い説である。

ところで白居易が十五夜の満月に「新月」の語を用いたのは、じつは基づくところがあるようである。というのは、初唐の神龍年間(七〇五〜七〇七)に成る崔液の有名な「上元の夜(正月十五日の燈籠祭り)六首」其三に、「鵝鵲樓前新月滿、鳳皇(鳳)臺上寶燈燃」とあるからである。十五夜の満月を「新月滿つ」と表現する點は、注目に値し、盛唐の岑參「楊子を送る」詩にも、「新月 家に到れば圓かなり」とある。また于武陵「望月」詩の「新魄又將滿、故鄉應漸遙」、溫庭筠「鬢策の歌」の「臘烟如霧新蟾滿、門外沙平草牙短」の新魄・新蟾も「新月」の類語であり、ほぼ同じ表現と考へてよい。

この「新月滿」と關連して興味深いのは、本詩より十年ほ

ど後に作られた白詩「客中の月」(卷十二)の、「曉隨殘月行、夕與新月宿(曉に殘月に隨いて行き、夕べに新月と與に宿る)」である。月初めの三日月は夜半を待たずに沈みゆき、下弦を過ぎた月末の月は夜明け、しばらく有明月になった後消えていく。従つてこの一聯は、旅先のある一日の夕暮れと翌日の未明を描寫したものではない。言い換えれば、詩中の新月と残月は、通常の用例よりも廣い意味で用いられている。日没時に月の姿が見えるのは、陰曆二、三日以降、日没とともにのぼりゆく十五日ごろまでである。詩中ではこれを新月と呼んでいる。これに對して、十五夜の滿月の後、日ごとに殘けて光も薄れてゆき、月の出自體も日没よりも日ごとに遅れて、二十一日以降になると、明け方の東の空に有明月となる。これを殘月と呼んでいる。こうした廣義の「新月」は、「新月滿つ」のイメージとも違和感はない。つまり新月は、日ごとに衰えゆく「殘月」とは逆に、日を追つて大きく明るく成長する、生命力に滿ちた月——二、三日から十五日に到る一月前半の月——を廣く指している。かくして「新」字には、從來の「生まれたての月」の意味の上に、さらに「日を追つて輝きを増す清新さ」の意味をも強くたたえるようになったのである。かくして新月と初月は本來、一種の類義語であつた

が、意味上大きな隔たりが生じることになった。(52)つまり、基本的に三日月の意味にとどまる初月と、それを遙かに越えて、満月までも指せるようになった新月との相違である。

ところで晩唐の乾符四年(八七七)秋の京兆府試に出題された試帖詩は、「殘月如新月(殘月は新月の如し)」であつた。(53)この詩題の出所は、おそらく六朝末の庾信「詠懷に擬す二十七首」其十八の、「殘月は初月の如く、新秋は舊秋に似たり」であろう。月末の殘月は月初めの初月(生まれたての月)と、殘缺して不完全な點ではほぼ同じなのだ、と。

この初月を新月に置きかえることによって、新月と殘月は、満月を境に、前半の明るく大きくなり續ける新月と、日ごとに缺けて暗くなりゆく殘月とを廣く指す言葉になった。福島久雄は『孔子の見た星空——古典詩文の星を讀む』(54)のなかで、「晝の月が夕方輝きを増すことを『舊月』と呼ぶならば、輝いて新たに出了た月を『新月』といふのであろう」とする。しかし舊月と言えば、通常「かつて見た月」「以前と變わらぬ月」を意味し、そうした意味の用例がないことは、その説が單なる思いつきに過ぎないことを示唆している。

新月は當初、初月とほぼ同意に用いられたが、やがて南朝・梁の鮑泉の詩(「奉和湘東王春日詩」)に、「新花滿新樹、新月

麗新輝」と歌われるように、「新」の字が、夜ごとに盈ちて明るくなる清新な月の光をも指すようになり、殘月と對する言葉にもなったのであろう。

とすれば、「新月―色」ではなく「新―月色」の意味に捉えて、「文字の對と概念の對」が相違する特殊なケースと見なす鈴木らの説は、再考を要しよう。もちろん「月色」という言葉はあるもの、そうした特殊な對句の用例として捉える必要はなく、新月は、その語義の廣がりのままに、この場合は單に、それが最高潮に達して満ち足りただけにすぎない。羅竹風主編『漢語大詞典』第六冊（一〇六六頁）は、新月に對して、「①農曆每月初出的彎形的月亮」「②農曆月逢十五日新滿的月亮」などの意味を記し、②の用例として白詩の本例を引く。②の例の新を「満ちたばかりの月」と見なす解釋は、再考を要しよう。この①②は、いわば本義と引申義の關係にあり、大きく一括することも可能なのである。

本詩の二年前（元和八年）の八月十五日（かそれに近い頃）に成る白詩「陶潛の體に效う詩十六首」其六（卷5）のなかにも、「團團新晴月、林外生白輪。…及對新月色、不醉亦愁人」（新月の色に對するに及び、酔はずんば亦た人を愁へしむ）云々とある。さらに其八にも、「老人勿遽起、且待新月華」（老人

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（十四）（植木）

遽かに起つ勿れ、且く新月の華を待て）という。同じ満月（かそれに近い丸い月）に用いられた、この二例も、強いて「新月色」「新 月華」と捉える必要はなく、立野春節和刻本や佐久節譯注本などのごとく、「新月の色」「新月の華」と訓讀してよい。ちなみに菅原道眞「正月十六日、宮妓の踏歌を憶ふ」詩（『菅家文章』卷四）の、「此夜應同新月色、他郷不似舊年心」も、「新月の色」と捉えてよい。十六夜月を「新月」と呼んだ特殊な用例ではあるが、三十日で終わる大の月では十六日、二十九日で終わる小の月では十五日が、望（満月）とされることを考えれば、特に問題視するに値しない。

このように考えてくると、「東の空に出たばかりの月。大きく、そして明るい」や、別の白詩「三月三日祓禊」（略題。卷33、後集卷14）中の「新月」に對する注「出たばかりの月。光のあざやかさをいう。月齡には關係しない。弦月にも満月にもいふ」と説明する平岡武夫の解釋は、注目すべき説ではあるが、若干修正が必要になる。それは、月初め、再び誕生し始めたばかり、という新の本義を考慮せず、東の空（あるいは天空）に出たばかり、という意味に捉えることである。また月齡に關係しないという點も、新月が通常一月後半の月を指さないことを考えると、いささか疑問になる。筆者自身

もかつて平岡説と同様に記したことがあり、やはり若干の修正を必要とする。新月は本来、初月と同様に、生まれればかりの三日月を指したが、のちに新の字が、日ごとに輝きを増す月光の、みずみずしい明るさをも指すようになり、満月に成長する全過程の月を呼べるように考えられ、ついに「新月満つ」の表現を生んだのだ。そして「満つ」の字を伴わずに「新月」の語で直接満月を指す白詩の三例は、唐詩の世界でも、きわめて斬新な表現であった、と。

この新月と同様に物議を醸した言葉に、王之涣「鸛鵲樓に登る」詩の「白日」<sup>(61)</sup>がある。この白日に對して、清水茂は「『白日』の解釋」<sup>(62)</sup>の中でこういう(要約)。

白日は朝・晝・晩の、どの太陽をも指すことができるが、白日の白は、黃鳥・玄鳥・朱鳥・青鳥などと區別する辨別的能力を持った白鳥の白ではなく、白銀・白鷺・白雪などと同様に、修飾される名詞の特性を強調する場合(元來、「白」特性を持つものに白の字をつけたもの)の用例に屬する。そしてその言葉が常用されるにつれて、「白」の字が持つ意味(明るい、輝く)は減少し、余分の言葉のようになつていく(ただし、ある種の連想や陰影は伴う)。こうした余分な言葉は、字數の定まった定型詩を作成する場合には必要

なものである。

このことを「輝く太陽」というよりも、「輝く太陽」という意味である、とする指摘もある<sup>(63)</sup>。

新月が初月と大きく異なるのは、新の字が修飾される名詞「月」の特性を強調した形容詞としても捉えうる、という點である。新月が満月をも指しえるのも、このためであろう。

この意味で、「十五夜ノ新月トハ、殊ニ新ナルヲ云也」(國會圖書館本『和漢朗詠注』<sup>(64)</sup>三)、「新月ノ色トハ、常ノ光リニ替テ、アラタナル光リト云義也」(『假名注』<sup>(65)</sup>)などの古注は、中秋の名月の特徴をいささか強調しすぎる嫌いがあるが、おおむね妥當であろう。「新に出でたる月」(柿村『考證』)「出たばかりの月」(高木正一『白居易』下)などとする解説は、やはり改めなければならぬ。

○「千里」 「故人」(舊友) 元稹の左遷された江陵は、都長安の「東南一千七百里」(『舊唐書』卷三九、地理志<sup>(66)</sup>)のあなたにあった。平岡武夫『白居易』(一五一頁)にいう、「この唐の里數をメートルに換算するより前に、私たちは『千里別る』『千里隔たる』という詩語があることを思うべきである。それは遠く遠く隔たる所、月の光だけが雙方の人を結びつける所をいう」と。白居易は別の詩「自ら拙什を吟ず。

困りて懐ふ所有り」(巻6、元和七年の作)のなかでも、江陵府に謫居された元稹を、「相ひ去ること二千里、詩成るも遠ければ知らず」と歌う。

## 注

- (1) 遼海出版社、一九九八年。  
 (2) 澤崎久和「劉禹錫『送春曲』三首をめぐって」、『中國中世文學研究四十周年記念論文集』白帝社、二〇〇一年所收)は、「元和十年、夏から秋にかけて、長安での作」として、最も可能性の高い春に言及しない。  
 (3) 古くは張愔の父、張建封を指すと考えられたが、南宋の陳振孫「白文公年譜」(汪立名『白香山詩集』所收)の考證以來、子の張愔に訂正された。  
 (4) 國立公文書館(内閣文庫)に所蔵する『重鈔管見抄』には、「燕子樓」詩の序文と第一首のみを収め、盼を昉に作るが、昉は宋版の昉の俗字である(張涌泉『敦煌俗字研究』上海教育出版社、一九九六年参照)。盼盼・昉昉は、宋代混用されたようであるが、「美目盼たり」(『詩經』衛風「碩人」)の語への連想を持つと考えられ、ひとまず盼盼の字に従う。張忱石『全唐詩作者索引』(中華書局、一九八三年)も、「按其名文意、當作盼盼爲是」という。ちなみに盼盼の名は、白詩に『和漢朗詠集』所收唐詩注釈補訂(十四)(植木)

續いて、五代の章毅編『才調集』巻十に収める一首(じつは張仲素「燕子樓」詩第一首)の作者として見え、昉昉に作る。これは、おそらく盼盼の形訛であろう。盼盼の姓は一般に關とされるが、その論據は未詳。明の郎瑛『七修類稿』卷三六、燕子樓の條には、「姓關、或曰許」とある。

- (5) 原文は「僅一紀矣」。この僅は「ほとんど……に達しようとしている」(幾平、差不多達到)の意で、むしろ多いことという用例。従って佐久節・田中克己・堤留吉らの訓「わづかに」には従わない。こうした僅は、一説に「近の同音通假」であるともいう(董志翹『中國文獻語言論叢』巴蜀書社、二〇〇〇年)。ただし『重鈔管見抄』には、僅を餘に作る。この餘は數詞の前(通常は後)に置かれて余數をあらわす用例(江藍生・曹廣順『唐五代語言詞典』上海教育出版社、一九九七年)と考えられるが、白居易の傳記や作品の作成年代上、僅字に劣るようである。僅の意味を正確につかみかねて改變された可能性もある。

- (6) 「續之」にも作るが、誤り。また「繪之」とも書く。繪と續は音通。

- (7) 『重鈔管見抄』には怨麗に作る。

- (8) 『重鈔管見抄』には詰を詰に誤る。

- (9) 張仲素の傳記は、『唐才子傳校箋』巻五(第二冊)張仲素の條(吳汝煜執筆)とその補正(第五冊、陶敏・陳尙君執筆)

## 中國詩文論叢 第二十一集

- 参照。ちなみに佐久注の「名は績之、字は仲素」は誤り。
- (10) この詩は、かつて盼盼の作とも考えられたが、白詩の序によって張仲素の作であることがわかる。
- (11) 前掲の『唐五代文學編年史(中唐卷)』も、元和十年の作とする。
- (12) 『第一屆國際唐代學術會議論文集』臺灣學生書局、一九八九年所收。
- (13) 陝西人民出版社、一九八三年。張悱の死を元和二年とするのも、元和元年の誤り。
- (14) 楊長卿「彭城燕子樓佳話之闡述」(『中華文化復興月刊』第一卷第五期、一九八八年)参照。
- (15) 南宋の洪邁『容齋三筆』卷十二、「盼(盼)秦秋娘三女」の條参照。
- (16) 後述の西村登美子の論文、朱『箋校』九二七頁以下、王仲鏞『唐詩紀事校箋』卷七八、張建封妓の條など参照。
- (17) 李劍國『宋代志怪傳奇叢錄』(南海大學出版社、一九九七年)参照。
- (18) 鹽見邦彦『唐詩口語の研究』(中國書店、一九九五年)参照。
- (19) 伊藤正義ほか編著『和漢朗詠集古注釋集成』第二卷上所收。
- (20) 當該詩には、「皎皎當牕牖、空牀難獨守」の句がある。『文選』卷二九所收。
- (21) 矢嶋美都子「樓上の思婦―閨怨詩のモチーフの展開」(『日本中國學會報』第三七集、一九八五年)参照。
- (22) ウィリアム・H・ニイハウザー(川合康三譯)「英語による白居易研究」(『白居易研究講座』第五卷、勉誠社、一九九四年)に據る。
- (23) 上海辭書出版社刊『唐詩鑑賞辭典』(一九八三年)所收。
- (24) 松浦友久編『續校注唐詩解釋辭典「付」歷代詩』(大修館書店、二〇〇一年)所收の當該詩の條(植木久行執筆)参照。
- (25) 前掲の沈祖芬・程千帆の鑑賞では、「只好起來收拾臥床」と譯される。
- (26) 三重大學人文學部文化學科『人文論叢』第十一號、一九九四年所收。
- (27) 佐久譯は、「やえわたる寒月の意にとる。
- (28) 蔣紹愚『唐詩語言研究』(中州古籍出版社、一九九〇年)の付録「唐詩詞語小札」参照。
- (29) 王云路『漢魏六朝詩歌論稿』(陝西人民教育出版社、一九九七年)一五五頁参照。
- (30) 松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』(大修館書店、一九八七年)五八四頁の「夜來」の解説参照。
- (31) 拙著『唐詩歲時記』(講談社・學術文庫、一九九五年)「秋の詩」参照。
- (32) 栗斯『唐詩故事』第四集(地質出版社、一九八三年)も、

この立場である(三〇三頁)。

- (33) 陝西人民出版社、一九八二年。
- (34) 花房英樹・前川幸雄『元稹研究』、および下孝萱『元稹年譜』によれば、元和五、六年から元和九年までの作。
- (35) 冀勤點校『元稹集』も、詠を玩に作るほかは同じ。
- (36) 『國立民族博物館藏 貴重典籍叢書』文學篇第二一卷(漢詩文)「臨川書店、二〇〇一年影印」に據る。
- (37) 後藤昭雄ほか『江談抄 中外抄 富家語』(岩波書店、新日本古典文學大系、一九九七年)等に據る。
- (38) 板尾武編著、臨川書店、一九九三年。
- (39) 筑摩書房、中國詩文選、一九七七年。
- (40) 張國剛『唐代官制』(三秦出版社、一九八七年)第二章第四節參照。
- (41) 馬得志・馬洪路『唐代長安宮廷史話』(新華出版社、一九九四年)など。
- (42) 辛德勇『隋唐兩京叢考』(三秦出版社、一九九一年)や、妹尾達彦『長安の都市計畫』(講談社、二〇〇一年)所收の「長安の大明宮」圖など參照。
- (43) 宋の程大昌『雍錄』卷四に付す「大明宮右銀臺門・翰林院・學士院圖」や、それに基づいて新たに作成された平岡武夫編『唐代の長安と洛陽 地圖』(同朋舎出版、一九七七年)第三一圖を參照。
- (44) 毛蕾『唐代翰林學士』(社會科學文獻出版社、二〇〇〇年)參照。
- (45) 詳しくは松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』の當該詩の條(埤田重夫執筆)參照。
- (46) 陳の後主叔寶「有所思三首」其一に「初月似愁眉」とあり、隋の盧思道「日出東南隅行」に「初月正如鉤」などがある。
- (47) 李益と廣宣上人との聯句「重陽夜集蘭陵居、與宣上人聯句」にも、「新月和秋露、繁星混夜露」(廣宣)とある。
- (48) ただし五代・李中「七夕」詩にも、「織織初月苦難留」とあって、新月に近い使われ方がしてある。
- (49) 『東光』(支那學別卷)二號、一九四七年。
- (50) 唐の劉肅『大唐新語』卷八、文章第十八による。
- (51) 中唐の權德輿(七五九〜八一八)の「新月與兒女夜坐聽琴舉酒」詩にも、「以茲皓月圓、不厭良夜深」とある。茲は此の意。
- (52) 玄宗の開元間に成る繆氏の子(名は未詳)「賦新月」詩に「初月如弓未上元:三五團圓照滿天」とある。ここには、初月と新月との違いが表れている。
- (53) 五代・王定保『唐摭言』卷二、置等第の條參照。鄭谷に「京兆府試殘月如新月」詩が傳わる。
- (54) 大修館書店、一九九七年。
- (55) 白詩「感月悲逝者」(卷13)の「月色今宵似往年」、岑參

『和漢朗詠集』所收唐詩注釈補訂(十四)(植木)



## 中國詩文論叢 第二十一集

- 「南池夜宿：」詩の「雨洗月色新」など。
- (56) 羅『年譜』は、連作第七首の「中秋三五夜」によって、八月十五日の作と見なす。
- (57) 前掲の鮑照の「月を城西門の解中に：」詩の李善注に引く『釋名』に「望、滿之名。月大十六日、月小十五日」とある。
- (58) 平岡武夫『白居易』。
- (59) 平岡武夫『白居易―生涯と歳時記』（朋友書店、一九九八年）所收の「三月三日 上巳 洛濱修禊―白詩歳時記」。
- (60) 拙著『唐詩歳時記』二六三頁。
- (61) 詳しくは松浦友久編『校注唐詩解釋辭典』の當該詩の條（増子和男執筆）参照。
- (62) 同『中國詩文論叢』（創文社、一九八九年）所收。
- (63) 一海知義『漢詩一日一首（春・夏）』（平凡社、一九七六年）。
- (64) 注（19）と同じ。
- (65) 注（19）の第二卷下所收。
- (66) 平岡武夫『白居易』には『元和郡縣圖志』を引くが、現存の當該書には見えない。